

# パーリ文法家モッガラーナと聖典\*

矢崎 長潤

## 1 問題の所在

南インドのチョーラ朝による支配を排斥したのち、混乱状態にあったスリランカを再統一したパラッカマバーフ I 世 (Parakkamabāhu I, 1153–1186 年) は、出家教団の改革を敢行した。サンスクリット大乘仏典を受容していた無畏山寺 (Abhayagirivihāra) 派と祇陀林寺 (Jetavanavihāra) 派を、事実上解体して、出家教団をパーリ語原理主義に徹する大寺 (Mahāvihāra) 派に併合した。これにより、ブッダの教えはパーリ語のみで伝承されるべきという見解がスリランカの出家教団のなかで正統的なものとなったという<sup>1</sup>。この時期、教理綱要書、詩論書、そして仏伝文学などの数多くの作品がパーリ語にて編纂されるなかで、パーリ語文法書『モッガラーナ文法』 (Moggallānavyākaraṇa) もまた、文法家モッガラーナ (Moggallāna, 12 世紀頃<sup>2</sup>) によって著された。

諸学問の基礎学に位置づけられる文法学 (vyākaraṇa) は、インド本土では仏教徒にとって重要な学課の一つであった<sup>3</sup>。こうした事情は、スリランカの仏教徒にとっても同様であったようで、例えば、パーリ聖典の代表的な注釈者ブッダゴーサ (Buddhaghosa, 5 世紀頃) は、パーニニ (Pāṇini, 紀元前 5–4 世紀頃) の『八課集』 (Aṣṭādhyāyī) を前提とする議論をしばしば展開している<sup>4</sup>。また、片山 [1969] は、7 世紀以降、パーリ語独自の文法文献が次々と著されていったことについて、6–7 世紀頃にスリランカにおいてサンスクリット大乘経典が流行しはじめ、それに伴いスリランカの学僧にパーリ語そのものに対する認識を深めさせたことがその要因となったかもしれないと推測している。

パーリ語文典の目的は、ブッダの教えを正しく理解するための方法を教示することである<sup>5</sup>。現在我々の目にすることができる文典は、三つで、モッガラーナ著『モッガラーナ文法』、カッチャーヤナ (Kaccāyana, 6–7 世紀頃) 著『カッチャーヤナ文法』 (Kaccāyanavyākaraṇa)、および『モッガラーナ文法』と同時期の成立と見られ、ビルマの学僧アッガヴァンサ (Aggavaṃsa, 12 世紀) によって著された『サッダニーティ』 (Saddanīti) である<sup>6</sup>。

全 6 章、810 の規則にて構成される『モッガラーナ文法』は、これらの三つの文法書のなかで、文法的な観点からいえば、もっとも体系的で整った文法書と評される<sup>7</sup>。また、この文典は、仏教

---

\* 本稿を作成するにあたり、名和隆乾先生 (大阪大学)、Dragomir Dimitrov 先生 (フィリップ・マールブルク大学)、Mahesh A. Deokar 先生 (サヴィトリヴァイ・プレ・プネー大学)、川村悠人先生 (広島大学)、藤本晃先生 (広島大学)、山崎一穂先生 (中村元東方研究所) からさまざまなご教示を頂きました。記して謝意を表します。なお、これは JSPS 科研費 22J00212 による成果の一部です。

<sup>1</sup>馬場 [2022: 177–211] 参照。

<sup>2</sup>モッガラーナの活動年代については、Deokar [2008: 28] 参照。

<sup>3</sup>矢崎 [2022a 4–5] 参照。

<sup>4</sup>『ダンマパダ』 (Dhammapada 352) には、ブッダの法を理解するための手段として、言葉に通暁することの重要性が説かれている (Deokar [2008: 4])。Cf. 「愛欲を離れ、執着なく、諸の語義に通じ諸の文章とその脈絡を知るならば、その人は最後の身体をたもつものであり、「大いなる智慧ある人」と呼ばれる」 (中村 [1978 (2015) : 59])。

<sup>5</sup>Deokar [2008: 4–5] 参照。

<sup>6</sup>パーリ語文法書の概要については、片山 [1969]、Kahrs [1992: 1–4]、Deokar [2008]、渡邊 [2015] 参照。

<sup>7</sup>Deokar [2008: 4–6, 28–35] 参照。

文法家チャンドラゴーミン（Candragomin, 5世紀頃）の確立したサンスクリット語文法の体系に大きく依拠していることが知られている<sup>8</sup>。『モッガラーナ文法』は、『規則』（*sutta*）、『注釈』（*vutti*）、『詳解』（*pañcīkā*、『注釈』に対する注釈）という三つの文献（すべてモッガラーナの手による著作<sup>9</sup>）から構成され、各々、チャンドラゴーミンの『チャンドラ規則』（*Cāndrasūtra*）、ダルマダーサ（*Dharmadāsa*, 5–6世紀<sup>10</sup>）なる人物に帰される『チャンドラ注釈』（*Cāndravṛtti*）、ラトナマティ（*Ratnamati*, 異名 *Ratnaśrījñāna*, 10世紀）の『チャンドラ詳解』（*Cāndrapañjikā*）からの影響が看取される<sup>11</sup>。

その一方で、『モッガラーナ文法』には、チャンドラ文法の体系にはない顕著な特徴が見られる。すなわち、モッガラーナはしばしばパーリ聖典から語句や表現を取り上げて分析を加えている。しかし、モッガラーナが、どうしてまたどのような観点から、このような分析を行っているのかという問題は、筆者が調査したかぎりではこれまで検討されていないと思われる。本稿は、筆者が現在出版準備をしている資料に基づき<sup>12</sup>、事例研究の一つとして、二つの規則に関連して三つの用例を取り上げて検討する。

## 2 サンスクリット語文法からの逸脱

モッガラーナの規則 M 2.4: *gatibodhāhārasaddatthākammakabhajjādīnaṃ payojje* は、いわゆる二重目的語を規定するもので<sup>13</sup>、チャンドラゴーミンの規則 C 2.1.44: *gatibodhāhārasabdārthānāpyānāṃ prayojje* に相当する<sup>14</sup>。パーリ語文典とサンスクリット語文典の二つの『注釈』に見られる表現や内容の類似性から、モッガラーナがチャンドラゴーミンの文法に依拠していることは明らかである。

<sup>8</sup>このことは、百年以上も前に、R. O. Franke によって指摘されている（Dimitrov [2016: 604] 参照）。

<sup>9</sup>Deokar [2008: 28] は、『規則』と『注釈』の著者を同一人物とすることについて検討の余地があるとしているが、Deokar [2017: 697] は同一人物説を支持している。

<sup>10</sup>『チャンドラ注釈』の著者問題については、矢崎 [2022a: 69–75] 参照。Dimitrov [forthcoming] は、チャンドラゴーミンとダルマダーサを同一人物と見る。Yazaki [2022b: 53–55] は、チャンドラ文法の伝統解釈によれば、『チャンドラ規則』と『チャンドラ注釈』とが不可分の構成体として見られていたことを指摘している。

<sup>11</sup>Dimitrov [2016: 607, 613]、Deokar [2017: 697]、矢崎 [2022: 36, note 112] 参照。ただし、モッガラーナの『詳解』のなかに、『チャンドラ注釈』と『チャンドラ詳解』の内容が混在している場合もあり（例えば、M 5.61: *tumāyetaḥ bhāve bhavissati kriyāyaṃ tadatthāyaṃ*）、必ずしも一対一の関係で対応しているわけではない。また、モッガラーナは、チャンドラゴーミンの規則ではなく、パーニニの規則にしたがう場合もある（例えば、M 2.3: *kāladdhānam accantasamyoge*; A 2.3.5: *kālādhvanor atyantamyoge*）。『モッガラーナ文法』に関わる諸文献については、橋堂 [1997: 45–48] 参照。

<sup>12</sup>Deokar/Dimitrov/Yazaki [forthcoming] 参照。

<sup>13</sup>M 2.4 は、特定の意味をもつ動詞語根が使役形として使用されるとき、被使役主体（*payojjakattar*）を意味する語に対して、第二格接辞-*aṃ* の導入を規定する。例えば、*Yaññadatto gamayati māṇavakaṃ gāmaṃ*（ヤンニャダッタは少年を村へ行かせている）という事例には、二つの〈主体〉（*kattar*）が認められる。すなわち、村に向かうことを命令している使役主体（*payojjakattar*）である「ヤンニャダッタ」（*Yaññadatta*）と、村に向かうことを命じられている被使役主体（*payojjakattar*）である「少年」（*māṇavaka*）とである。この規則により、村に向かわせられる被使役主体である「少年」を意味する *māṇavaka* という語の後で、第二格接辞が導入される。一方、定動詞 *gamayati* の意味する「行く行為」に関連して、「村」は行為の〈対象〉（*kamma*）として関与する。したがって、「村」を意味する *gāma* という語の後で、M 2.2: *kamme dutiyā* という規則より第二格接辞が導入される（*gāma+aṃ* → *gāmaṃ*）。つまり、この規則は、二重目的語を規定するものである。なお、本規則が適用できない場合には、被使役主体を意味する語の後で、第二格接辞ではなく第三格接辞が導入される。例えば、*pāceti odanam Devadattena Yaññadatto*（ヤンニャダッタはデーヴァダッタに粥を煮させている）という事例では、デーヴァダッタは煮る行為に関連して、被使役主体として関与する。これを意味する *Devadatta* という語の後で、M 2.16: *kattukaraṇesu tatiyā* という規則により第三格接辞が導入される。

<sup>14</sup>両文法体系の規則対応については、Gornall [2013: 87] 参照。

- パーリ語文典：モッガラナーナの『規則』（*sutta*）と『注釈』（*vutti*）<sup>15</sup>

M 2.4: *gatibodhāhārasaddatthākamakabhajjādīnaṃ payojje*.

MV on M 2.4: *gamanathānaṃ bodhatthānaṃ āharatthānaṃ saddatthānaṃ akammakānaṃ bhajjādīnaṃ ca payojje kattari dutiyā hoti. sāmatthiyā ca payojakabyāpārena kammata 'v' assa hoti 'ti patiyate – gamayati māṇavakaṃ gāmaṃ, yāpayati māṇavakaṃ gāmaṃ; ... sāyayati Devadattaṃ; aññaṃ bhajjāpeti, aññaṃ koṭṭāpeti, aññaṃ saṃtharāpeti. etesam evā 'ti kim? pāceti odanaṃ Devadattena Yaññadatto.*

進行を意味する〔動詞語根〕に関する、認識を意味する〔動詞語根〕に関する、飲食を意味する〔動詞語根〕に関する、発声を意味する〔動詞語根〕に関する、〈対象〉を有しない〔動詞語根〕（自動詞）に関する、〔動詞語根〕*bhajj*（炒める）などに関する、使役されるべき〈主体〉が表示されるべきとき、第二格接辞が導入される。そして、使役者の活動によって、これ（使役されるべき〈主体〉）には、かならず〈対象〉性があると文脈上から理解される。[以下のような実例が挙げられる。]

*gamayati māṇavakaṃ gāmaṃ*（〔彼は〕少年を村へ行かせている）。

*yāpayati māṇavakaṃ gāmaṃ*（〔彼は〕少年を村へ向かわせている）。... [中略] ...

*sāyayati Devadattaṃ*（〔彼は〕デーヴァダッタを寝させている）。

*aññaṃ bhajjāpeti*（〔彼は〕ほかの人に炒めさせている）。

*aññaṃ koṭṭāpeti*（〔彼は〕ほかの人に挽かせている）。

*aññaṃ saṃtharāpeti*（〔彼は〕ほかの人に広げさせている）。

[問:]「これら〔の動詞語根〕に関してだけ」というのは、なぜか。

[答:]「以下の場合に規則を適用しないためである。」

[反例:] *pāceti odanaṃ Devadattena Yaññadatto*（ヤンニヤダッタはデーヴァダッタに粥を煮させている）。

- サンスクリット語文典：チャンドラゴーミンの『規則』（*sūtra*）と『注釈』（*vṛtti*）<sup>16</sup>

C 2.1.44: *gatibodhāhārasābdārthānāpyānāṃ prayojye*.

CV on C 2.1.44: *gatyarthānāṃ bodhārthānāṃ āhārārthānāṃ śabdārthānāṃ anāpyānāṃ ca prayojye kartari dvitīyā vibhaktir bhavati. sāmartyāc ca prayojakavyāpāreṇa vyāpyataivāsya bhavātīti gamyate – gamayati māṇavakaṃ grāmam, yāpayati māṇavakaṃ grāmam; ... sāyayati Devadattaṃ. eteṣāṃ eveti kim? pācayaty odanaṃ Devadattena.*

進行を意味する〔動詞語根〕に関する、認識を意味する〔動詞語根〕に関する、飲食を意味する〔動詞語根〕に関する、発声を意味する〔動詞語根〕に関する、〈対象〉を有しない〔動詞語根〕（自動詞）に関する、使役されるべき〈主体〉が表示されるべきとき、第二格接辞が導入される。そして、使役者の活動によって、これ（使役されるべき〈主体〉）には、かならず〈対象〉性があると文脈上から理解される。[以下のような実例が挙げられる。]

*gamayati māṇavakaṃ grāmam*（〔彼は〕少年を村へ行かせている）。

*yāpayati māṇavakaṃ grāmam*（〔彼は〕少年を村へ向かわせている）。... [中略] ...

<sup>15</sup>モッガラナーナ文法のテキストは、現在準備中の校訂翻訳研究（Deokar, Dimitrov, and Yazaki）からの引用である。既刊校訂本（Dhammānanda [1931]）では、pp. 43.3–44.4 に当たる。なお、本稿で引用するパーリ文献の正書法は、上記の校訂翻訳研究で採用する方法にしたがっている。

<sup>16</sup>『チャンドラ注釈』のテキストは、現在準備中の校訂テキスト（Deokar, Dimitrov, and Yazaki）からの引用である。既刊校訂本（Liebich [1918]）では、pp. 103–104 に当たる。

sāyayati Devadattam ([彼は] デーヴァダッタを寝させている)。

[問:] 「これら [の動詞語根] に関してだけ」というのは、なぜか。

[答:] [以下の場合に規則を適用しないためである。]

[反例:] pācayaty odanaṃ Devadattena ([彼は] デーヴァダッタに粥を煮させている)。

両注釈における類似性は、逆にモッガラーナの独自性を際立たせている。モッガラーナは、『規則』において、チャンドラゴーミンの規則には見られない *bhajjādi* (「動詞語根 *bhajj* (炒める) など)」という項目を新たに規定し、またそれに関する三つの実例 (*aññaṃ bhajjāpeti* / *aññaṃ koṭṭāpeti* / *aññaṃ samtharāpeti*) を挙げている。こうした表現は、パーリ聖典の『律蔵』(Vinaya-piṭaka) のなかに見られる。

• 『律蔵』「比丘尼分別」(bhikkhunīvibhaṅga) 〈波逸提法〉

Vin (p. 264.25–34): yā pana bhikkhunī āmakadhaññaṃ viññitvā vā viññāpetvā vā bhajjitvā vā bhajjāpetvā vā koṭṭitvā vā koṭṭāpetvā vā pacitvā vā pacāpetvā vā bhuñjeyya, pācittiyaṃ ti. ... bhajjitvā 'ti sayamaṃ bhajjitvā. bhajjāpetvā 'ti aññaṃ bhajjāpetvā. koṭṭitvā 'ti ... koṭṭāpetvā 'ti ... pacitvā 'ti ... pacāpetvā 'ti aññaṃ pacāpetvā.

[比丘尼波逸提法第七条<sup>17</sup>:] 「いずれの比丘尼であっても、未調理の穀物を求めて、あるいは求めさせて、または炒めて、あるいは炒めさせて、または挽いて、あるいは挽かせて、または煮て、あるいは煮させてから、食べるのならば、波逸提 (pācittiya) である。」... [中略] ... bhajjitvā とは、自分自身で炒めて [ということであり]、bhajjāpetvā とは、ほかの人に炒めさせて (aññaṃ bhajjāpetvā) [ということである]。koṭṭitvā とは... [自分自身で挽いて、ということであり]、koṭṭāpetvā とは、... [ほかの人に挽かせて (aññaṃ koṭṭāpetvā)、ということである<sup>18</sup>]。pacitvā とは、... [自分自身で煮てから、ということであり]、pacāpetvā とは、ほかの人に煮させてから (aññaṃ pacāpetvā)<sup>19</sup> [ということである]。

Vin (pp. 274.25–275.1): yā pana bhikkhunī vikāle kulāni upasaṃkamitvā sāmike anāpucchā seyyamaṃ samtharitvā vā samtharāpetvā vā abhinisīdeyya vā abhinipajjeyya vā, pācittiyaṃ ti. ... samtharitvā 'ti sayamaṃ samtharitvā. samtharāpetvā 'ti aññaṃ samtharāpetvā.

[比丘尼波逸提法第十七条<sup>20</sup>:] 「いずれの比丘尼であっても、不適切な時間に家々を訪問して、世帯主に聞くことなく、寝床を広げたり、あるいは広げさせていたりしてから、または座るのならば、あるいは横になるのならば、波逸提である。」... [中略] ... samtharitvā とは、自分自身で広げて [ということであり]、samtharāpetvā とは、ほかの人に広げさせて (aññaṃ

<sup>17</sup>この条文は、比丘尼が未調理の穀物を求めて、それを調理したり、あるいはだれかに調理させたりすることなどを禁ずるものである。この詳細については、平川 [1998: 444–445] 参照。

<sup>18</sup>PTS の校訂本では、aññaṃ koṭṭāpetvā という文は省略されているが、Chatṭha Saṅgāyana 版ではこの文が見られる。

<sup>19</sup>『律蔵』には、aññaṃ pacāpetvā (ほかの人に煮させてから) という表現が見られる。この表現は、当該規則と照らし合わせると齟齬があるように思われる。なぜなら、動詞語根 *pac* は、M 2.4 に列挙される動詞語根の意味のいずれにも適合せず、また *bhajjādi* という項目のなかにも含まれないからである。実際、モッガラーナは、『注釈』において、pāceti odanaṃ Devadattena Yaññadatto (ヤンニヤダッタはデーヴァダッタに粥を煮させている) という反例を提示し、動詞語根 *pac* に関しては当該規則が適用されないことを説明している。なお、モッガラーナだけでなく、注釈者たちもこの問題についてなにも述べていない。このことについては検討されるべき余地があるが、ここでは問題を指摘しておくだけに留めておく。

<sup>20</sup>この条文は、比丘尼が非時 (正午以降) に在家の家を訪ねて、世帯主の許可を得ずに勝手に座具などを敷いて休むことを禁ずるものである。平川 [1998: 467–468] 参照。

saṃtharāpetvā)<sup>21</sup> [ということである]。

『律蔵』のなかに見られる表現は、いずれも絶対詞のかたち (bhajjāpetvā / koṭṭāpetvā / saṃtharāpetvā) である一方で、モッガラーナが提示する実例はいずれも定動詞のかたちである (bhajjāpeti / koṭṭāpeti / saṃtharāpeti)。おそらくモッガラーナは、より一般的な形式で実例を提示しようとしていると考えられる。bhajj (炒める) などの三つの動詞語根に関して、被使役主体である「ほかの人」(añña) に第二格接辞を適用することは、パーニニ文法学であっても<sup>22</sup>、チャンドラ文法学であっても正当化しがたい<sup>23</sup>。それゆえ、モッガラーナは、パーリ聖典に見られる表現を考慮し、これらの言語表現がサンスクリット語文法の規則では説明が困難であることを認識して、規則に *bhajjādi* という項目を追加したと思われる<sup>24</sup>。

### 3 既存文法体系に対する批判

モッガラーナの規則 M 2.2: *kamme dutiyā* は、目的語に当たる語に第二格接辞の導入を規定するもので、チャンドラゴミンの規則 C 2.1.43: *kriyāpye dviṭṭiyā* に相当する<sup>25</sup>。モッガラーナは、『チャンドラ注釈』の説明に手を加えつつも、大枠としてその解釈を踏襲している<sup>26</sup>。その一方で、彼は同注釈の末尾において、『相応部経典』(Saṃyuttanikāya) から *sace maṃ n' ālapissati* (もしも彼が私に話しかけないならば...) という表現を引用している。この実例は『チャンドラ注釈』には見られない。

- パーリ語文典：モッガラーナの『注釈』(vutti)<sup>27</sup>

MV on M 2.2: *karīyati kattukriyāyābhisambandhīyātī 'ti kammaṃ. tasmimṃ dutiyā vibhattī hoti – kaṭaṃ karoti, odanaṃ pacati, ādiccaṃ passati. odano pacatī 'ti odanasaddato kammaṭā na patīyate, kiṃcaraḥi ākhyātato. ... evaṃ sace maṃ n' ālapissatī 'tiādisu 'pi.*

〈対象〉(kamma) とは、なされるもの、すなわち〈主体〉の行為と結び付けられるものである。それが表示されるべきとき、第二格接辞が導入される。[以下のような実例が挙げられる。]

*kaṭaṃ karoti* ([彼は] 敷物を作っている)。

*odanaṃ pacati* ([彼は] 粥を煮ている)。

*ādiccaṃ passati* ([彼は] 太陽を見ている)。

<sup>21</sup> aññaṃ saṃtharāpetvā という表現は、経分別 (比丘戒) の波逸提第十四条にも見られる。Cf. Vin (p. 40.14–18): *saṃtharitvā 'ti sayam saṃtharitvā. saṃtharāpetvā 'ti aññaṃ saṃtharāpetvā. anupasaṃpannaṃ saṃtharāpeti, tassa palibodho. upasaṃpannaṃ saṃtharāpeti, saṃthārakassa palibodho.* 「saṃtharitvā (広げてから) とは、自分自身で広げてから [ということであり]、saṃtharāpetvā とは、ほかの人に広げさせてから [ということである]。具足戒を受けていない者に広げさせる。その者には障碍が起こる。具足戒を受けた者に広げさせる。広げる者に障碍が起こる。」

<sup>22</sup> A 1.4.52: *gatibuddhipratyavasānārthaśabdakarmākarmakāṇāṃ añikartā sa ṇau.* この規則の詳細については、川村 [2017: 180] 参照。

<sup>23</sup> 炒めたり、挽いたり、煮たりする行為は、食べる行為そのものではないので、規則中の項目 *āhārattha* (「飲食を意味する動詞語根」) には含まれないと考えられる。

<sup>24</sup> von Hinüber [2022: 68] は、『律蔵』に見られる使役動詞に関わる二重目的語の用例を検討している。ここでは、モッガラーナの実例は引用されておらず、また、それゆえこれらの表現がサンスクリット語には見られないといった指摘もされていない。

<sup>25</sup> 両規則の対応については、Gornall [2013: 87] 参照。

<sup>26</sup> Cf. CV on C 2.1.43: *kriyāvāpye dviṭṭiyā vibhaktir bhavati – kaṭaṃ karoti, odanaṃ pacati, ādityaṃ paśyati. odanaṃ pacyata ity odanaśabdād vyāpyatā na gamyate, kiṃtarhi tiṇantāt.*

<sup>27</sup> 既刊校訂本 (Dhammānanda [1931]) では、pp. 37.2–40.2 に当たる。

odano paccati（粥が煮られている）では、粥（odana）という語から〈対象〉性は理解されない。そうではなくて、定動詞のかたち（ākhyāta）から〔〈対象〉性が理解される〕。…〔中略〕…同様に、〔実例：〕sace maṃ n' ālapissati（もしも彼が私に話しかけないならば…）などについても〔第二格接辞が導入される〕。

- 『相応部経典』「マーナッタッタ（傲慢）経」（Mānathaddha-sutta）<sup>28</sup>

SN (I, p. 177.27–29): sace maṃ samaṇo Gotamo ālapissati aham pi tam ālapissāmi. no ce maṃ samaṇo Gotamo ālapissati aham pi taṃ n' ālapissāmi `ti.

もしも沙門ゴータマが私に話しかけるのならば、私も彼に話しかけよう。もしも沙門ゴータマが私に話しかけないのならば、私も話しかけないようにしましょう、と。

モッガラーナの引用する実例とパーリ聖典の表現とは完全には一致していない。こうした傾向は、カッチャーヤナの文典にも見られる。おそらく、文法家たちは、より一般化したかたちで実例を提示していると思われる<sup>29</sup>。上記の実例について、モッガラーナは『詳解』（pañcīkā）において次のように述べている。

- パーリ語文典：モッガラーナの『詳解』<sup>30</sup>

MP on MV to M 2.2: **sace maṃ n' ālapissati** `tiādisu `pi sahatthatatīyāvisaye dutiyā `bhimatā kesaṃ ci. sā `pi sahatthāvacanicchāyaṃ kammattā `va siddhā `ti dassetuṃ vuttaṃ: **evam** iccādi.

**sace maṃ n' ālapissati**（もしも彼が私に話しかけないのならば…）などについても、saha（共に）の意味を表示する第三格接辞の適用領域で、第二格接辞〔の導入〕が、ある〔文法家〕たちにとって望まれている。sahaの意味を表現しようと意図しないとき、〔当該規則（M 2.2）に規定されるところ〕と同じ〈対象〉性に基づいて、それ（第二格接辞）も成立する。以上のことを説明するために〔『注釈』は次のように〕述べている。**evam**（同様に）云々と。

モッガラーナは、まず、ほかの文法家たちによって、特定の条件下で第二格接辞に関する規則が規定されていると述べてから、そうした規則が不要と主張している。彼の批判は、同様の実例を引用しているカッチャーヤナの規則 K 2.6.37/309: *tatīyāsattamīnaṃ ca* に対するものであると考えられる。

- パーリ語文典：カッチャーヤナの『規則』（sutta）と『注釈』（vutti）

K 2.6.37/309: *tatīyāsattamīnaṃ ca*.

KV on K 2.6.37/309: *tatīyāsattamīnaṃ ca atthe kva ci dutiyā vibhatti hoti – sace maṃ samaṇo Gotamo n' ālapissati*.

第三格接辞や第七格接辞の意味が表示されるべきとき、ある場合には、第二格接辞が導入される。〔実例：〕sace maṃ samaṇo Gotamo n' ālapissati（もしも沙門ゴータマが私と話さないならば…）<sup>31</sup>。

<sup>28</sup> ブッダが高慢なバラモンの心を読んで、母や父、師、長兄などを敬うべきことを諭し教えて、その結果、高慢なバラモンが三宝に帰依したことを説く経である（片山 [2012: 22, 247–251] 参照）。なお、経典名などについては、PTS 版にしたがう。

<sup>29</sup> 例えば、本稿で引用している K 2.6.37/309 の実例も聖典と一致していない。

<sup>30</sup> 既刊校訂本（Dhammānanda [1931]）では、p. 41.19–21 に当たる。

<sup>31</sup> この規則と実例については、ダシユ [2021: 235] が引用している。

sace maṃ n' ālapissati（もしも彼が私と話さないなら…）という上記の実例において、maṃ（私に）という表現には第二格接辞（-aṃ）が導入されている。カッチャーヤナによれば、この第二格接辞は、第三格接辞の意味で使用されるものであって、K 2.6.17/289: *sahādiyoge ca*<sup>32</sup>に規定される意味を担うものである。すなわち、「私に」ではなく、「私と共に（saha）」という意味で第二格接辞が使用されている。一方、モッガラーナによれば、実例中の maṃ という表現は、「私に」を意味するもの、つまり〈対象〉を意味する語にほかならず、当該規則によって第二格接辞の導入が正当化される。もしも話者によって「私と共に」という意味が意図されるのであれば、\*sace mayā saha n' ālapissati（もしも彼が私と話すなら…）のように、M 2.17: *sahatthena* という規則により第三格接辞を伴う mayā という表現が使用されることになる。その場合、注釈者が明示するように、saha という語は省略可能である<sup>33</sup>。モッガラーナは、以上のように聖典の表現を解釈して、カッチャーヤナの規定する規則を不要としている。モッガラーナは、パーリ語独自の表現に対して各個に規則を設けるのではなく、サンスクリット文法の規則に準じた解釈で説明しようとしている。こうした傾向は、次の事例においても見られる。

#### 4 サンスクリット文法に基づく聖典解釈

モッガラーナは、規則 M 2.2: *kamme dutiyā* において先の引用に続いて、『相応部経典』と『中部経典』（*Majjhimanikāya*）から次のような表現を引用して、分析を加えている。

- パーリ語文典：モッガラーナの『注釈』（*vutti*）<sup>34</sup>

MV on M 2.2: *vihitā 'va paṭiyoge dutiyā – paṭi bhantu taṃ Cunda bojḥhaṅgā 'ti. taṃ pati bojḥhaṅgā bhāsantū 'ti attho. yadā tu dhātunā yutto pati, tadā tenāyogā saṃbandhe chaṭṭhī 'va – tassa na paṭibhātī 'ti.*

paṭi と [いう語と] 結びつくとき、第二格接辞 [の導入] はすでに規定されている。[実例:] *paṭi bhantu taṃ Cunda bojḥhaṅgā*（彼に諸々の覚支がひらめき出るべし<sup>35</sup>、チュンダよ）と。「彼に対して諸々の覚支がひらめけ」という意味である。一方、動詞語根と *pati* が結びつくとき<sup>36</sup>、それ (*paṭi*) が [taṃ とは] 結びつかないので、関係の意味で、第六格接辞のみが導入される。[反例:] *tassa na paṭibhātī*（彼にはひらめき出ない）と。

- 『相応部経典』「第三病人経」（*Tatīyagilāna-sutta*）<sup>37</sup>

<sup>32</sup>KV 2.6.17/289: *sahādiyogathe ca tatiyā vibhatti hoti – sahāpi Gaggena saṅgho uposathaṃ kareyya.* 「saha などに結びつく意味が表示されるべきとき、第三格接辞が導入される。[実例:] *sahāpi Gaggena saṅgho uposathaṃ kareyya.*（ガッガが一緒でも [そうでなくても] サンガは布薩をしてもよい。）」

<sup>33</sup>パーニニ文法家は、*saha* という語が使用されないときにも、A 2.3.19: *sahayukte 'predhāne* により第三格接辞が導入できると解釈している（川村 [2017: 343–344] 参照）。同様の解釈が、モッガラーナの『詳解』に対する注釈書（*Moggallānapañcika-tīkā*, 12–13 世紀頃）にも見られる。Cf. MPT on MP 2.17: *ato yeva vinā 'pi sahasaddappayogaṃ tappariyāyappayogaṃ vā sahatthena yoge vidhānato asaty api sahādisaddappayoge yattha tadattho gamyate tatthāpi bhavaty eva tatiyā gamyamānena sahatthena yogā. yathā syādi syān' e* (M 3.1: *syādi syādin' ekatthaṃ*) *iti.* 「だからこそ、*saha* という語を使用しなくても、あるいはそれ (*saha* という語) の同類語を使用しなくても、*saha* を意味する [語] との結びつきに関する [当該] 規則 (M 2.17) に基づいて、たとえ *saha* などの語が使用されていないなくてもその意味が理解される場合には、すでに理解されている *saha* を意味する [語] と結びついている第三格接辞がたしかに導入される。例えば、M 3.1: *syādi syādin' e[katthaṃ]* というように [*saha* が使用されていないなくても第三格接辞の適用が見られるからである。]

<sup>34</sup>既刊校訂本（*Dhammānanda* [1931]）では、p. 40.3–6 に当たる。

<sup>35</sup>「諸々の覚支がひらめき出るべし」（*bhantu bojḥhaṅgā*）とは、「覚支が頭の中に浮かぶ」ということであり、覚支について理解できるように話せという意味である。

<sup>36</sup>モッガラーナによれば、*t* 音と *ṭ* 音とは任意に代置可能である（M 1.52: *tathanarānaṃ ṭaṭhaṇalā*）。

<sup>37</sup>病気にかかって苦しんでいたブツダが、マハーチュンダに対して七覚支の内容を説くように言い、チュン

SN (V, p. 81.9–11): *ekam antaṃ nisinnaṃ kho āyasmantaṃ Mahā-Cundaṃ Bhagavā etad avoca: paṭi bhantu taṃ Cunda bojjaṅgā 'ti.*

一方に坐った尊者マハーチュンダに世尊は実にこう言われた。「彼に諸々の覺支がひらめき出るべし、チュンダよ」と。

- 『中部経典』「愛生経」（Piyajātika-sutta）<sup>38</sup>

MN (p. 106.5–6): *tassa kālakiriyāya n' eva kammaṃtā paṭibhanti, na bhantaṃ paṭibhāti.*

〔愛児の〕死によって、彼には仕事のことまったくひらめき出ないし（頭にのぼってこない）、食事のことひらめき出ない（頭にのぼってこない）。

上記の実例は、『カッチャーヤナ文法』には見られない。ただし、同様の文法事項を扱った規則は存在する。

- パーリ語文典：カッチャーヤナの『規則』と『注釈』

K 2.6.36/308: *kva ci dutiyā chaṭṭhīnaṃ atthe.*

KV on K 2.6.36/308: *chaṭṭhīnaṃ atthe kva ci dutiyā vibhatti hoti. api ssa maṃ Aggivessana tisso upamāyo paṭibhaṃsu.*

第六格接辞の意味が表示されるべきとき、ある場合には、第二格接辞が導入される。〔実例：〕*api ssa maṃ Aggivessana tisso upamāyo paṭibhaṃsu*（すると、アッグヴェッサナよ、私にとって三つの喩えがひらめき出た）。

二人のパーリ文法家が扱っている問題は同じで、*paṭi bhantu/paṭibhaṃsu*（*pati* を離して読むか否かもこの問題にかかわる）という語に関連して、*maṃ*（私に）という語に対する第二格接辞の導入をどのように正当化するかというものである。ここでの両者の解釈の相違は、すでにサンスクリット文法家の解釈のなかにその源泉が見てとれる。文法家パタンジャリ（Patañjali, 紀元前2世紀頃）は、この問題について次のように述べている<sup>39</sup>。

MBh on A 2.3.2 (p. 444.4–9): *apara āha:*

*ubhasarvatasoḥ kāryā dhiguparyādiṣu triṣu /  
dvitīyāmreḍitānteṣu tato 'nyatrāpi dr̥ṣyate //*

... **tato 'nyatrāpi dr̥ṣyate:** *na Devattaṃ pratibhāti kiṃ cit. bubhukṣitaṃ na pratibhāti kiṃ cit.*

ほかの人たちは〔次のように〕言っている。

*ubhataḥ* および *sarvataḥ* に関して、*dhik* や 〈二回述べられた語のなかの後の要素〉（*āmreḍita*）<sup>40</sup>を終わりにもつ *upari* などの三つの〔語〕に関して、第二格接辞〔の導入〕が定式化されるべきである。それとは別の場合にも〔第二格接辞の導入が〕観察される。

ダが適切に答え、ブツダがその内容を是認して病気から立ち直ったということを説く経である（片山〔2021: 39, 332–334〕参照）。

<sup>38</sup>愛児をなくした資産家に対して、ブツダは「苦しみや悲しみは、愛情から起こる」と説くが、資産家はそれに納得せず、ブツダを非難して立ち去る。このことが、国王や王妃に伝わり、国王たちは事の真相を確かめようとする。彼らは、愛情に関するブツダの深い洞察を知って、ブツダを称賛するという内容の経である（片山〔2017 (2000): 39, 294–307〕参照）。

<sup>39</sup>パタンジャリの見解の詳細については、Joshi/Roodbergen〔1976: 54–56〕参照。

<sup>40</sup>*āmreḍita* については、Joshi/Roodbergen〔1976: 56 note 165〕参照。Cf. A 8.1.2: *tasya param āmreḍitam.*



... [中略] ... **tato 'nyatrāpi dr̥śyate**（それとは別の場合にも〔第二格接辞の導入が〕観察される）について。[実例:] *na Devattaṃ pratibhāti kiṃ cit*（デーヴァダッタにはなにもひらめき出ない）。*bubhuksitaṃ na pratibhāti kiṃ cit*（飢えた人 [= 食欲の生じるころの人] には〔食べ物以外に〕ひらめき出ない（頭にのぼってこない））。

パタンジャリは、*na Devattaṃ pratibhāti kiṃ cit*（デーヴァダッタにはなにもひらめき出ない）などの実例に関して、*Devadatta* や *bubhuksita* という語に対して第二格接辞が導入されることをほかの文法家の見解として紹介している。パーニニ文法家のカイヤタ（*Kaiyata*, 11世紀頃）によれば、*pratibhāti* の *prati* は接頭辞であって、定動詞などによって表示されていない行為を表示する項目、すなわち *karmapravacanīya* という術語で呼ばれるべきものではない<sup>41</sup>。もしも後者であれば、特段の規則や規定を設けることなく、A 2.3.8: *karmapravacanīyayukte dviṭīyā*、および A 1.4.90: *lakṣaṇe-tthambhūtākhyānabhāgavīpsāsu pratiparyanaḥ* により<sup>42</sup>、第二格接辞の導入が正当化される。しかし、上記のような詩偈が説かれ、実例が提示されているということは、*prati* が *karmapravacanīya* と理解されるべきではないという見解が当時の文法家のなかであったことを示唆する。つまり、A 2.3.8 などの規則によって第二格接辞の導入が説明できない<sup>43</sup>。

一方、チャンドラ文法家は、カイヤタの解釈とは異なり、上記の実例における *prati* が接頭辞ではなく、*karmapravacanīya* であると理解している。チャンドラ文法では、この術語は用いられないが、A 2.3.8 と A 1.4.90 と同様の文法事項を規定する C 2.1.55: *pratiparibhyāṃ bhāge ca*<sup>44</sup> によって、第二格接辞の導入が正当化される。

- サンスクリット文典：チャンドラ文法の『注釈』（*vṛtti*）と『詳解』（*pañjikā*）

CV on C 2.1.50: *bubhuksitaṃ na prati bhāti kiṃ cid iti bubhuksitaṃ prati na prakāśate kiṃ cid ity arthaḥ. sambandhe tu ṣaṣṭhī – Devadattasya na pratibhāti.*<sup>45</sup>

[実例:] *bubhuksitaṃ na prati bhāti kiṃ cid*（飢えた人には〔食べ物以外の〕ひらめき出ない（頭にのぼってこない））とは、飢えた人に対して〔食べ物以外の〕なにも頭に浮かばないという意味である。一方、関係が表示されるべきとき、第六格接辞が導入される。[反例:] *Devadattasya na pratibhāti*（デーヴァダッタには〔なにも〕ひらめき出ない）。

CP on CV to C 2.1.50: *pratiśabdaprayoge dviṭīyeṣyate. sā katham ity āsaṅkya pratiparibhyāṃ bhāge ca (C 2.1.55) ity evātra dviṭīyā siddhety udāhṛtyārtham ācakṣāṇaḥ kathayati: bubhuksitaṃ ityādi.*

*prati* という語を使用するとき、第二格接辞〔の導入〕が望まれる。それはどのようにしてか、という〔疑問を〕察知して、まさに C 2.1.55: *pratiparibhyāṃ bhāge ca* [という規則] によって、この [実例] について第二格接辞〔の導入〕が成り立つということを例証してから、[その] 意味を示すために [注釈者は次のように] 説明している。**bubhuksitaṃ**（飢えた人には）云々と。

*paṭi bhantu taṃ Cunda bojjaṅgā*（彼に諸々の覚支がひらめき出るべし、チュンダよ）という聖典の用例に対するモッガラーナの下記の説明は、『チャンドラ詳解』の説明をパーリ語にほとんど置き

<sup>41</sup>*karmapravacanīya* については、Joshi/Roodbergen [1969: 115 note 563]、川村 [2017: 93] 参照。

<sup>42</sup>これらのパーニニの規則については、川村 [2017: 329–331] 参照。

<sup>43</sup>パタンジャリの議論の詳細については、Joshi/Roodbergen [1976: 55–56] 参照。パタンジャリが

<sup>44</sup>CV on C 2.1.55: *pratiparibhyāṃ yuktāl lakṣaṇādiṣu bhāge cārthe dviṭīyā syāt – vṛkṣaṃ prati vidyotate.* 「〈特徴〉などを意味するとき、あるいは〈部分〉を意味するとき、*prati* または *pari* と結びつく [語] の後で、第二格接辞が導入されるべきである。[実例:] *vṛkṣaṃ prati vidyotate*（〔稲妻が〕木に向かってきらめいている）。」

<sup>45</sup>既刊校訂本（Liebich [1918]）では、p. 105 に当たる。

換えたものである。ここでの聖典表現に対する彼の分析は、既存文典への批判というよりは、むしろサンスクリット文典の解釈を基盤として、パーリ聖典の表現を特殊な規則を規定することなしに解釈しようとしたものと考えられる。

- パーリ語文典：モッガラナーナの『詳解』

MP on MV to M 2.2: patisaddayoge dutiyā `bhimatā. sā `pi patiparīhi bhāge ca (M 2.9) ity eva siddhā `ti dassetuṃ vuttam: **vihitā `vā `tiādi.**<sup>46</sup>

pati という語と結びつくとき、第二格接辞 [の導入] が望まれる。それ（第二格接辞）も、まさに M 2.9: *patiparīhi bhāge ca*<sup>47</sup> という [規則] に基づいて成り立つ。以上のことを説明するために [『注釈』は次のように] 述べている。**vihitā `va**（すでに規定されている）云々と。

## 5 結論

サンスクリット文法家は、実際の言語使用と規則とを照らし合わせて、規則に過不足があれば訂正や改定を行う。また、ときに規則中の語句や規則そのものの必要性をも議論する。こうした営みは、文法家たちにとっての典型的な活動として知られている<sup>48</sup>。パーリ聖典に対するモッガラナーナの分析も、基本的にこうしたものから逸脱するものではない。ただし、モッガラナーナがパーリ聖典におけるサンスクリット語の表現からの逸脱を観察して、それを規則に反映していること、さらにまたパーリ聖典に対する彼の分析には、パーリ語原理主義のなかであっても、サンスクリット文法学の高度な知識が土台として存在していたことが注目される。

### 略号および一次文献

A: *Aṣṭādhyāyī* of Pāṇini. See Cardona [1997: Appendix III].

C: *Cāndrasūtra* of Candragomin. *Cāndra-vyākaraṇa: Die Grammatik des Candragomin. Sūtra, Uṇādi, Dhātupāṭha*. Ed. Bruno Liebich. Leipzig: F. A. Brockhaus, 1902.

CV: *Cāndravṛtti* of Candragomin (Dharmadāsa). See CP and also *Candra-Vṛtti: Der Original-Kommentar Candragomin's zu seinem grammatischen Sūtra*. Ed. Bruno Liebich. Abhandlungen für die Kunde des Morgenlandes. Vierzehnter Band. Leipzig: F. A. Brockhaus, 1918.

CP: *Cāndrapañjikā* of Ratnamati/Ratnaśrījñāna. *Cāndravākyakaraṇa 2.1: The Section on Nominal Cases of Candragomin's Grammar of Sanskrit. A Critical Edition of the Cāndrasūtra, Vṛtti, and Pañjikā*. Ed. Mahesh Deokar, Dragomir Dimitrov, and Chōjun Yazaki (矢崎長潤). Pune Indological Series. forthcoming.

K: *Kaccāyanasutta* of Kaccāyana. *Kaccāyana and Kaccāyanavutti*. Ed. Ole Holten Pind. Bristol: The Pali Text Society, 2013; *Kaccāyana et la littérature grammaticale du Pāli*. Ed. E. Senart. Paris: Impr. nationale, 1871.

KV: *Kaccāyanavutti* of Saṅghanandin. See K.

M: *Moggallānasutta* of Moggallāna. *Moggallāna Pañcikā with Sutta Vutti by the Venerable Moggallāna Mahā Sāmi. Revised and Edited by Dharmānanda Nāyaka Sthavira*. Ed. Dhammakittissiri Dhammānanda. Colombo: Satyasamuccaya Press, 1931.

*Moggallānaganapāṭha* of Moggallāna. See M.

MBh: *Mahābhāṣya* of Patañjali. *The Vyākaraṇa-Mahābhāṣya of Patañjali: Edited by F. Kielhorn. Third Edition, Revised and Furnished with Additional Readings, References, and Select Critical Notes by K. V.*

<sup>46</sup>既刊校訂本（Dhammānanda [1931]）では、p. 41.24–26 に当たる。

<sup>47</sup>MV on M 2.9: *patiparīhi yuttamhā lakkhaṇādisu bhāge c' atthe dutiyā hoti – rukkaṃ pati vijjotate vijju.* 「〈特徴〉などを意味するとき、あるいは〈部分〉を意味するとき、pati または pari と結びつく [語] の後で、第二格接辞が導入される。[実例:] *rukkaṃ pati vijjotate vijju*（稲妻が木に向かってきらめいている）。」Dhammānanda の校訂本における規則番号は、2.11 である。

<sup>48</sup>Joshi/Roodbergen [1969: i-x] 参照。

- Abhyankar*. Ed. F. Kielhorn (K. V. Abhyankar). 3 vols. Vol. 1. Poona: BORI, 1962. (Vol. 1: Fourth Edition, 1985; Reprint, 2005).
- MN: *Majjhimanikāya*. *The Majjhima-nikāya*. 3 vols. Vol. 2. Ed. Robert Chalmers. London: The Pali Text Society, 1896. (Reprinted with Added Corrections, 2016).
- MP: *Moggallānapañcīkā* of Moggallāna. See M and also *Moggallānavyākaraṇa 2.1–40: The Section on Nominal Cases of Moggallāna's Grammar of Pali. A Critical Edition and Translation of the Moggallāna-sutta, Vutti, and Pañcīkā*. Ed./Tr. Mahesh Deokar, Dragomir Dimitrov, and Chōjun Yazaki (矢崎長潤). Pune Indological Series. forthcoming.
- MPT: *Moggallānapañcīkā-ṭīkā* of Saṅgharakkhitta. Chatṭha Saṅgāyana Pāli Tipiṭaka (<https://tipitaka.app>).
- MV: *Moggallānavutti* of Moggallāna. See M and also MP.
- Vin: *Vinaya*. *The Vinaya Piṭakam: One of the Principal Buddhist Holy Scriptures in the Pāli Language*. Ed. Hermann Oldenberg. 5 vols. Vol. 4. London: The Pali Text Society, 1882. (Reprinted, 2001).
- SN: *Saṃyuttanikāya*. *The Saṃyutta-Nikāya* of the Sutta-piṭaka. 5 vols. Vol. 1: Sagātha-vaggo, Vol. 5: Mahāvagga. Ed. Léon Feer. London: The Pali Text Society, 1884/1898. (Reprinted with Corrections, 2020; Reprinted, 2022).

## 二次文献

- Baba, Norihisa (馬場紀寿)  
2022 『仏教の正統と異端：パーリ・コスモポリスの成立』、東京大学出版会。
- Cardona, George  
1997 *Pāṇini: His Work and Its Traditions. Vol. 1: Background and Introduction*. Second Edition. Revised and Enlarged. Delhi: Motilal Banarsidass.
- Dash, Shobha Rani (シヨバ・ラニ・ダシュ)  
2021 『パーリ語文法：仏典の用例に学ぶ』、法蔵館。
- Deokar, Mahesh A., Dragomir Dimitrov, and Chōjun Yazaki (矢崎長潤)  
forthcoming See CP and MP.
- Deokar, Mahesh A.  
2008 *Technical Terms and Technique of the Pali and the Sanskrit Grammars*. Miscellaneous Series 23. Varanasi: Central Institute of Higher Tibetan Studies.  
2017 “The Cāndravvyākaraṇapañjikā: An Important Tool for the Study of the Moggallānavuttivivaraṇapañcīkā: A Case Study Based on a Cambridge Fragment of the Cāndravvyākaraṇapañjikā with Special Reference to CV 2.2.1 and MV 3.1.” in Vincenzo Vergiani, Daniele Cuneo and Camillo Alessio Formigatti (eds.): *Indic Manuscript Cultures Through the Ages: Material, Textual, and Historical Investigations*. Berlin: De Gruyter. pp. 695–726.
- Dhammānanda, Dhammakittissiri  
1931 See M.
- Dimitrov, Dragomir  
2016 *The Legacy of the Jewel Mind: On the Sanskrit, Pali, and Sinhalese Works by Ratnamati. A Philological Chronicle (Phullalocanavaṃsa)*. Napoli: Dipartimento Asia Africa e Mediterraneo Università degli studi di Napoli “L’Orientale.”  
forthcoming “Einige philologische Notizen über die Cāndravṛtti.”
- Gornall, Alastair  
2013 “Buddhism and Grammar: The Scholarly Cultivation of Pāli in Medieval Laṅkā.” An Unpublished Ph.D. Thesis Submitted to the University of Cambridge.
- von Hinüber, Oskar  
2022 *Studien zur Kasussyntax des Pāli, besonders des Vinaya-Piṭaka*. Studia Inologica Universitatis Halensis, Band 19. München: J. Kitzinger.
- Hirakawa, Akira (平川彰)  
1998 『比丘尼律の研究』(平川彰著作集第13巻)、春秋社。

Joshi, S. D. and J. A. F. Roodbergen

- 1969 *Patañjali's Vyākaraṇa-Mahābhāṣya: Avyayībhāvatatpuruṣāhnikā (P. 2.1.2–2.1.49)*, Edited with Translation and Explanatory Notes by S. D. Joshi in Collaboration with J. A. F. Roodbergen. Publications of the Centre of Advanced Study in Sanskrit, Class C, no. 5. Pune: University of Poona.
- 1976 *Patañjali's Vyākaraṇa-Mahābhāṣya: Anabhihitāhnikā (P. 2.3.1–2.3.17)*, Introduction, Text, Translation and Notes by S. D. Joshi and J. A. F. Roodbergen. Publications of the Centre of Advanced Study in Sanskrit, Class C, No. 11. Pune: University of Poona.

Kahrs, E. G.

- 1992 “Exploring the Saddanīti.” *Journal of the Pali Text Society* 17: 1–212.

Katayama, Ichiro (片山一良)

- 1969 「パーリ語文法學の系譜」『印仏研』34, 17(2): 154–155。
- 2000 『パーリ仏典：〈第1期〉4 中部（マッジマニカーヤ）中分五十經篇2』、大蔵出版。（Reprinted, 2017）。
- 2012 『パーリ仏典：〈第3期〉2 相應部（サンユッタニカーヤ）有偈篇』、大蔵出版。
- 2021 『パーリ仏典：〈第3期〉9 相應部（サンユッタニカーヤ）大篇1』、大蔵出版。

Kawamura, Yūto (川村悠人)

- 2017 『バツティの美文詩研究：サンスクリット宮廷文学とパーニニ文法學』、法蔵館。

Kitsudo, Masahiro (橘堂正弘)

- 1997 『スリランカのパーリ語文獻』、山喜房佛書林。

Liebich, Bruno

- 1918 See CV.

Nakamura, Hajime (中村元)

- 1978 『ブツダの真理のことは 感興のことは』、岩波書店。（Reprinted, 2015）。

Watanabe, Yoichiro (渡邊要一郎)

- 2015 「Saddanīti の議論の特徴について：動詞語尾の kāla 分類議論を中心として」『パーリ学仏教文化學』29: 55–78。

Yazaki, Chojun (矢崎長潤)

- 2022a 『チャンドラゴーミン研究序説：仏教徒の見たサンスクリット文法學』、法蔵館。
- 2022b “On the Theory of Karman in the Cāndra grammar.” *Nagoya Studies in Indian Culture and Buddhism: Saṃbhāṣā* 38: 43–58.

(やざき ちょうじゅん、(独) 日本学術振興会特別研究員 PD [インド哲学])

Some Canonical Examples in the *Moggallānavyākaraṇa*

YAZAKI Chōjun

The *Moggallānavyākaraṇa*, a Pali grammar composed by Moggallāna (*ca.* twelfth century), is known to rely heavily on the system of Sanskrit grammar formulated by the Buddhist grammarian Candragomin (*ca.* fifth century). The *Moggallānavyākaraṇa* has, however, a remarkable feature naturally absent from Candragomin's Sanskrit grammar: Moggallāna often cites and analyzes expressions or phrases from the Pali canon. Until now, this characteristic of his Pali grammar has not received enough attention. On the basis of materials currently being prepared for publication, the present study first identifies the sources of some canonical examples treated in Moggallāna's grammar and then examines his reasons for citing them. The following cases are specifically discussed:

1. In M 2.4 (*gatibodhāhārasaddatthākammabhajjādīnaṃ payojje*), corresponding to C 2.1.44 (*gatibodhāhārasabdārthānāpyānāṃ prayojye*), Moggallāna prescribes in his rule a new item, namely *bhajjādi* “[the verbal roots] *bhajj* ‘to roast,’ etc.,” that is not provided in Candragomin's rule. Accordingly, the Pali grammarian presents three additional examples such as *aññaṃ bhajjāpeti* “He prompts someone else to roast.” These examples are found in the *Vinaya-piṭaka* (IV, p. 264; pp. 274–275) in a slightly different form. The use of the second nominal case ending *-aṃ* in such expressions with *añña* (Skt. *anya*) would be ungrammatical in Sanskrit when occurring with forms derived from the verbal roots *bhajj*, etc. Moggallāna has modified Candragomin's rule in such a way that these canonical expressions can be also considered, reflecting the fact that these specific expressions in Pali cannot be justified by Sanskrit grammar.
2. At the end of his commentary on M 2.2 (*kamme dutiyā*) relevant to C 2.1.43 (*vyāpye dvitīyā*), Moggallāna quotes the example *sace maṃ n' ālapissati* “If [he] does not talk to me ...” from the *Samyuttanikāya* (I, p. 177). Moggallāna first says that other grammarians have preferred to formulate a rule concerning examples of this kind and then points out that such a rule is actually not necessary. Hence, it appears that the intention of his citation is to criticize another Pali grammar, namely, the *Kaccāyanavyākaraṇa* (*Kaccāyanasutta* 2.6.37/309: *tatiyāsattamīnaṃ ca*), where this example is indeed mentioned.
3. In the commentary of M 2.2, Moggallāna quotes furthermore the expressions *paṭi bhantu taṃ Cunda bojjhaṅgā* “Cunda, call to mind the limbs of wisdom!” and *tassa na paṭibhāti* “He has no inclination [to work or to eat]” from the *Samyuttanikāya* (V, p. 81) and the *Majjhimanikāya* (II, p. 106), respectively. The same examples are not cited in the *Kaccāyanavyākaraṇa*, although there is a rule that deals with a comparable matter (cf. *Kaccāyanasutta* 2.6.36/308). Hence, it is unlikely that Moggallāna intends to criticize another Pali grammatical system. Interestingly, Sanskrit grammarians discuss a similar issue and disagree regarding whether the word *prati* in examples such as *na Devadattaṃ pratibhāti kiṃ cit* “Devadatta cannot think of anything at all” is merely a prefix (*upasarga*) or a grammatical element called *karmapravacanīya* (in the second case one would write *prati bhāti* instead of *pratibhāti*). Moggallāna opines that the latter interpretation, which is actually preferred by the Cāndra grammarians, allows us to properly understand the canonical expressions in Pali. He attempts to explain the Pali phrases on the basis of the interpretation given by the Sanskrit grammarians without providing any special Pali rules.